

解 答

□

問1 a 征服 b 清浄 c 充満 d すべ [り]

問2 人間と相対する生き物 問3 ア 問4 エ

問5 A イ B ア C エ

問6 自ら垂れ流した廃棄物 問7 わがもの

問8 イ 問9 酸素 問10 命の綱

問11 ア B イ B ウ A エ A オ B

□

問1 a さと [す] b 集 [う]

問2 実に利発そうな顔をした子供

問3 I エ II 男の子の顔

問4 ウ 問5 焚き火の煙

問6 ア 問7 ア・エ 問8 イ・オ

問9 煙が目にしみたようだった 問10 ウ

問11 沈みがちな心を保たせ、心の底まで照らし人の心をあたためてくれる力である。また、人の心を溶かし、人を深いところで変え、人と人とを結びつけることができ、さらに、いつのまにか人の心のなかにこたえをだしてくれる力である。

解 説

□ 出典は、坂口謙吾「環境汚染で滅びないために 生物学者の目から見た環境問題」。

問2 「人類に寄りかかって生きていた生き物連中」と反対の意味ですので、——線①を含む段落の二つ後の段落の「人類とそこに寄りかかっている以外の生き物」が答えの内容です。この直後に、問い合わせ指定された10字の表現でこれを言い換えた「人間と相対する生き物」があります。

問3 知識しぶとく=簡単にあきらめない、ねばりづよく。

問4 知識我が世の春=自分にとって一番よい時期、最盛期。

問5 Aの直前「生物進化は…変化を地球上にもたらします。」の例がこのあと述べられているので、イの「たとえば」が入ります。Bの直後から「地球が誕生したころ、大気中に酸素はほとんどなかった」という話題に転換しているので、アの「ところで」が入ります。前の「全宇宙にあるほとんどの惑星や衛星の大気はそんなもの（酸素はほとんどない）です。」という内容を受けて、直後で「酸素が気体で存在する地球はかなり異常。」と言い換えて表現しているので、Cにはエの「つまり」が入ります。問6 問いの□の直前直後にある「生き物が」「滅びていく」という表現をヒントに本文を探すと、——線④を含む段落より二つ後の段落に「生き物が滅びていく理由の多くが、自ら垂れ流した廃棄物」という表現にたどり着きます。問い合わせ指定された10字に合う「自ら垂れ流した廃棄物」が答えです。「理由」という表現と問い合わせの「によって」が同じ働きをしていますね。

問7 知識わがもの顔=他人のことなど考えず、ずうずうしくふるまう。

問8 知識因果応報=過去の行為の善悪に応じた報い。自業自得=自分が悪いことをしたために受ける悪い報い。

問9 ——線⑦の前後を読むと、「人間もその中のひとつ。…⑦昔の生き物の排泄物を頼みに生きています。」とあり、人間が生きていくのに必要なものが「昔の生き物の排泄物」だということが分かります。また、「その中」という指示語がさす内容は、直前の「汚染空気に頼る生き物」です。「汚染空気」とは、酸素を含んだ空気のことです。——線⑦を含む段落より三つ前の段落に、「酸素は自分たち（=昔の生き物）の吐き出したもの」とあることから、答えは「酸素」です。

問10 「頼みの綱」という言葉があります。自分の頼る最重要のものを「綱」と表現します。答えは「命の綱」。

問11 ア最後の二段落を読むと、人間の言う「地球環境をよくする」は、結局、人間にとって有益なことにしかならない、人間に有益なようにしか判断できないということが分かります。（→B）イ「無駄な努力」とは書いてありません。（→B）ウ人間が昔の生き物の排泄物である酸素を頼りに生きている例を挙げて説明していましたが、これは生物の進化について読者に考えさせるための説明です。（→A）エ人間にとって必要な「酸素の発生（排出）は…環境破壊です」と最後から七段落目に書いてあります。（→A）オ炭酸ガスの増加は、今の地球上の生き物には向いていないことが、最後から三段落目「生き物がいる限り、そんなことはない」から分かります。（→B）

〔出典〕出典は、石田衣良「火を熾す」。

問2 「筋のよさそうな」から、光弘が、壮太について、ほめる内容を言っている部分を探します。すると最後から四段落目に「実に利発そうな顔をした子供」とあります。——線①が「人間」で終わっているので、答えも「子供」という名詞で終わらせます。

問3 ——線②の直後から始まる治朗と壮太の会話を追っていくと、壮太は治朗の質問に全て答えられています。その結果、「男の子（＝壮太）の顔には笑みが浮かんでいた。歌うようにいう。」ようになりました。自信が芽生えたのです。これが治朗の考えていたことです。

問4 前書きを読むと、治朗は会社に、壮太は小学校に行けなくなっていることが分かります。そんな二人が協力して火を熾すことをしている。つまり、二人は孤独ではなくなり、居場所を見つけられたのだと思い、「だいじょうぶ」と考えたのです。

問5 問いでは、「壮太にとっての小学校の様子」と「光弘にとっての会社の雰囲気」と聞いている点に注目します。壮太と光弘の両方について書かれている比喩的表現は、〈中略〉後の壮太のことばと、それを聞き、光弘の会社員時代を思った後に出てくる「焚き火の煙」です。

問6 知識はぜる＝勢いよく裂ける、割れる。

問7 直後の治朗のせりふから読み取ります。一つは会社にもいけないダメ人間は生きていてもしかたないと思いつめていた以前の自分を、今の自分から見るとおかしくなったということ（→ア）、また、死のうとまで思っていたということを笑い、人に話せるということは、その思いから解き放たれたということです。（→エ）

問8 ——線⑥のあとの治朗のせりふに注目です。「ほんとうにお世話になり」、「磯谷さんみたい…になりたい」という表現から、治朗の光弘への信頼（→イ）が読み取れます。また、そんな光弘に見守っていてもらえた心強いと思ったのです。——線⑥のうしろに「誰か人のためだったら」とあることから、光弘にもこの約束に参加してもらえば「決心したことを強固なものにする」ことができると考えたのでしょう。（→オ）

問9 感激の表れのひとつに「涙」があります。「光弘は目に涙がにじん」だという表現が、問八で確認した治朗のせりふのうしろにあります。しかし、問い合わせられているのは「照れ隠しをする光弘の気持ちが読み取れる表現」です。「涙」を感激の涙ではなく、煙のせいにしてごまかそうとしている表現、つまり「涙がにじんで」の直前の「煙が目にしみたようだった。」が答えです。

問10 光弘の焚き火は、治朗と壮太の二人に前向きな気持ちを持たせました。そのうえ二人は自分のことをしたってくれています。光弘の自信や喜びの気持ちが、「じっとしていられなくなって、手元にあった小枝を炎のなかに投げこんだ」という行動に表れたのです。

問11 焚き火が人に与える力について書いてある部分を追っていきます。問八で確認した治朗のせりふ、「この焚き火はほんとうにあたたかかった…心の底まで照らしてくれる」と、「不思議な話だと…」で始まる段落の「他人の心が結ばれことがある。きっと焚き火の炎が人の心を溶かすからなのだろう。火には人を深いところで変える力がある…沈みがちな心を保てた」、～～線のうしろ「いつのまにか自分のなかにこたえがでている」をまとめます。